

小中一貫におけるソフトバレーボール教材での カリキュラム開発

—ソフトバレーボールの発達段階における指導方法 Ⅲ—

矢藤真二郎 神重 修治 小早川善伸 松田 泰定
木原成一郎 松尾 千秋

1. はじめに

本研究の目的は知識理解(分かる)に裏打ちされた運動技能の獲得(できる)の学習, 健康観やゲーム運営など生涯スポーツに生かす(いかせる)学習を総合したカリキュラム開発を行うことである。本研究プロジェクトは研究を開始して5年目を迎えた。まず, 2003-2004年度に, 小学校高学年における必修種目であるサッカーとバスケットボールを教材としてねらいを共通化した指導方法を開発した。さらに, サッカーとバスケットボールの種目をもつ指導上の課題解決の方法として, フラッグフットボールを採りあげ, 4年, 6年, 7年の指導内容を考案し, 授業の実践を通して児童・生徒の状況判断能力の育成に向けた方策を検証してきた。

2005年度には, 新たにネット型のボール運動である「バレーボール」に注目し, 小中一貫で研究開発していくこととした。本学園では, 2005年度より「21世紀型教科学力」として, 「協同的創造力」に着目し, その力を育むために, 「協同的創造学習」を新たな教科学習のスタイルとして研究していくこととなった。体育科では, 「協同的創造力」について考えるにあたって, 子どもたちのコミュニケーションスキルの重要性に着目し, 有効な教材としてネット型ゲームの「バレーボール」を選び, 小中で連携しながら取り組むことにした。2005年度は, 体育科教員が指導している1年・4年・6年・8年を, 2006年度は, 3年・5年・7年と4年・6年について指導内容を提案し, 授業実践を通して児童・生徒の発達段階に応じて検証していった。

本2007年度は体育科で指導している小学2年, 5年, 6年, 7年・8年の授業実践を通して, 小中で一貫した授業づくりをさらに深め, 児童・生徒の発達段階に応じたより確かな指導内容の開発ならびに, バレーボ

ールの系統表に修正を加えながら実践・検証を進めていきたい。更に, 今年度は小学校で行っている協同的創造学習の選択教科(体育科)でもソフトバレーボールを実践し, 「ソフトバレーボール」から「バレーボール」への「動きと戦術行動」の転換につながる指導方法を開発していくことを目的とした。

本稿では, その中から2年・8年の実践について報告する。

2. 実践授業の構想

(1) 教材の特性

「バレーボール」が国際的に普及した原因については次のことが考えられる。まず, ネットによる境界線が相手チームとの直接的な接触を防ぎ, 危険性が少ないこと。そして, 年齢や性別の制約を受けず, 相応の運動量が確保できるゲームであるとともに, 季節によらずいつでも屋内外でのプレーが可能なことなどがある。加えて用具も簡単で, 少しの広場があれば, いろいろなルールで一度に多くの人数でプレーが可能である。

しかし, 小学生では, 誰もがプレーするには, ボールが硬くて重く, また, 授業向きのルールが確立していないなどの理由で児童には, 馴染みが薄いスポーツでもある。バレーボールは, ボールを繋いでいくところに大きな楽しみや喜びが生まれてくると考える。心が通い合っこそ, パスがつながり, 相手チームに攻撃をすることができる。また, お互いに心を通わせることの大切さに気づきチームゲームとしての認識が生まれたとき, 豊かな人間関係力が育ってくることを期待できる。

(2) 研究の視点

学習指導要領の中での「バレーボール」についての

扱いは、5・6年生の副教材とされることが多く、また、中学校では、競技バレーとしての指導法が確立している。そのため、小学校段階では、子どもたちにとってあまり馴染みがない。小学1年生から中学3年までのバレーボールの指導法を考えるにあたって、運動の特性を次のようにとらえた。

① コミュニケーションがとりやすい

プレーが1回ごとに途切れるため、チーム内でのコミュニケーションがとりやすい運動である。ゲームの中でも、狭いコートの中でチームの仲間と声をかけあったり作戦を確認し合ったりすることが容易で、チームの意識の調和をはかるのにたいへん適している。

② 自分たちの作戦が実現しやすい

ネットで区切られ、決められたコート内であるため、相手と接触することがほとんどなく、ボールが飛んでくる方向もだいたい決まっている。そのため、自分たちで考えた作戦が、ゲームの中で実現しやすい。

③ 誰もが今もっている力で楽しむことができる

ボールが軽くて柔らかいソフトバレーボールを使用することにより、ボールに対する恐怖感が少なく、誰もが安心してプレーすることができる。また、初期の段階では難しい技能を必要としないことから、ボール運動が苦手と感じている子どもでも十分に楽しむことが可能である。

バレーボールには、1人でボールに連続して触れることができないという特徴がある。バスケットボールやサッカーのように自分でドリブルをしたり、フラッグフットボールのようにランプレーしたりすることはできない。1回の触球で自分の役割を果たさなければならないため仲間との意志交流がより焦点化される競技である。仲間とのボールのつなぎ方を学ばせる手段として、プレーのイメージ(作戦)をチーム内で共有化する話し合いの活動が必要になってくる。また、ボールの種類やコートの広さ・ネットの高さなどの環境設定や学年の発達段階に応じたルールづくりを考えていくことにより、子どもたちの実態にあったものにしていくことも重要である。今年度も、これらのことをもとに取り組んだ実践例を示す。

3. 授業実践

実践①

単元	ソフトテニスバレーボール
学年	小学校第2学年(39名)
実践月	平成19年11月/12月

本単元での研究の視点

バレーボールの楽しさの1つにチーム内でボールをまわし、ネット越しの相手コートにボールを返して得

点を上げることがある。これまでのソフトバレーボールの授業ではパスを回すことを大切にしてきたため、練習ではできるだけ続けようとするが、いざ試合になると、できるだけ相手コートにすぐにボールを返そうとチーム内でのパスが少なくなってしまうことがあった。また、作戦を考えてゲームを始めても作戦どおりにいかなかったり、作戦を忘れてゲームを進めたりして、そのよさや有効性を感じることがあまりできていないようである。さらには、アドバイスする時、友だちのよいところを言うことはできるが、改善点までは言うことができないという子どもが多いようである。

そこで、「ソフトテニスバレーボール」という単元を計画した。「ソフトテニスバレーボール」は相手コートから投げ入れられたボールを相手コートに返すと得点となり、遠くに返すほど高得点になるゲームである。よって、子どもたちは高得点を狙いやすい友だち(前衛)へパスを回そうとするため、チーム内でパスをまわす必要性を感じてゲームをすることができると考えた。また、コートの中に入ることができる人数を決めワンプレーごとに選手交代を行うようにする。そうすることで、自分たちの作戦を確認しながらゲームを楽しみ、そのよさを感じることができるようにした。さらに、作戦を考え、ゲームの中でその作戦がうまくいったときにはほめあったり、アドバイスし合ったりすることでコミュニケーション力を育てることができると考えた。

検証の視点としては、次の3点とした。

- | |
|--|
| ○パスの必要性を感じ、運動を楽しむことができたか。 |
| ○作戦のよさや有効性を感じることができたか。 |
| ○友だちと協力して作戦を考えたり、よいところや、がんばったらよいところをアドバイスしたりして運動することができたか。 |

検証の方法はアンケート、授業での子どもたちの実態・変化、授業後の振り返りで行った。

(1) 単元について

① 子どもの実態

本学級の児童は、6月にシュートゲームを行い、ボールを投げたり捕ったりする技術を身につけ、攻守に別れチームで力を合わせてゲームを進めることができた。さらに、ゲームの中で、でてきた問題について話し合い、簡単なルールをつくりながら運動を楽しむことができた。今回のアンケート(11月)では、「バレーボールの楽しそうなところ」について、「ボールをうったりスパイクをしたりするところ」「ボールが落ちないようにパスをまわすところ」と考えている子ども

もがほとんどであった。また、「バレーボールをする時に作戦は必要か」については「必要だと思う」とほとんどの子どもが答えたが「どうして必要であるか」については「作戦がうまくいったらうれしいから」「いっぱい点をとることができるから」と答えた子どもが数人であった。それとは逆に、「作戦を考えてもみんなが守らない」「作戦通りにいかないことが多い」と考えている子どもが多かった。さらに、「友だちのよいところや、がんばったらよいところをアドバイスして協力して運動していますか」については、「よいところ」についてはほとんどの子どもがアドバイスできていると思っているが、「がんばったらよいところ」をアドバイスできている子どもは20%以下であった。

②指導にあたって

「ソフトテニスバレーボール」では、ネットの高さを100cm、ソフトバレーボールの重さを50gとした。高さはボールを相手コートに返しやすいうようにすること、相手コートからの高いボールがサービスされるようにすることを考え設定した。重さは安定性と落ちるスピードとを児童の実態に合わせて選んだ。

第1次では、風船を使って運動することを通して、だれもが打つ・はじくなどの基本的な動きを身につけることができるようにした。

第2次では、チームでボールを使った遊びをした。今回は全8チーム（1チーム5人）でペアになるチームを作り（4グループ）、お互いをアドバイスしあうようにした。また、チーム内では簡単な作戦を考えるようにした。これらのことを通して、自分たちがよりよくなるためにお互いのよいところや課題を認め合い、相互の意見を尊重し合って動きや作戦を創っていくとする集団を目指した。

第3次では、ネットを使って「ソフトテニスバレーボール」をした。相手コートに返すと得点になるようにし、できるだけ遠くに返すと高得点になるようにすることで、自分のコートのネットに近い友だちにつなぐ必要性を感じることができるようにするとともに、簡単な作戦を考えてみんなが楽しむことができるようにした。

(2) 単元の目標

- 友達と励まし合いながら安全に楽しく練習やゲームができるようにする。
- 自分のチームの課題に合わせて、動きを工夫したり、作戦を考えたりして運動できるようにする。
- 打つ・はじく・ひろうなどの技能を使い運動できるようにする。
- 動きや作戦について自分の考えを伝えると共に、

友だちの考えを尊重し協力して活動できるようにする。

(3) 単元の計画（全8時間）

- 第1次 オリエンテーション……………1時間
- 第2次 バレーボールのエクササイズ……………3時間
- 第3次 ソフトテニスバレーボール……………4時間

(4) 授業の実際

〈第1次〉

それから、ボールに慣れるためにボールを投げ上げいろいろな体の部位を使って捕ることと、ボールの動きに合わせて体を動かすことができるようにするため、4種類のボール（紙風船・ゴム風船・ソフトバレーボール・スポンジボール）を使ってボール遊びを行った。また、人数をかえることで友達の体の調子に気づいたり、協力し合いながら運動したりできるようにした。

まず、投げ上げでは、子どもたちは落ちてきたボールを手と胸で上手に捕っていた。しかし、思ったところに投げることができない子どもたちも多かった。

次に、4種のボールを使ったボール遊びでは、どのボールが続くかはじきやすいか考えながら運動することで、ボールによって落ちてくる速さが違うことに気づいていた。その理由としてはボールの大きさや重さ、材質などを挙げていた。特に紙風船や風船はなかなか落ちてこないのでバレーボールなどで使うはじく動きをよく使っていた。子どもたちはボールの特性に合わせて体の使い方を工夫することができていた。ソフトバレーボールではアンダーハンドパスのような形でボールをあげている子どもが多かった。

〈第2次〉

アンダーハンドパス・オーバーハンドパスなどパスの練習をしていた。まずは2人組みで投げられたボールをパスした。何人かの子どものよい動き（ひじやひざの曲げ方、指先の使い方、ボールの下に素早く動くことなど）を紹介することで全体に広がっていった。運動と運動の間でアドバイスタイムをとることで、相手の動きを真剣に見たり、友だちのアドバイスを活かしたりしようと進んで取り組む姿がみえた。次にチームでサークルパスをした。ここではペアのチームで交代して運動した。運動をしていないチームは運動をしているチームをみて、アドバイスするようにした。さらに、見る友だちを一人決めるようにした視点は2人組みの時に見つけたよい動きである。「ボールの下にすぐについてひざを曲げていたところがいいよ」「ひじがまっすぐに伸びていてよかった」「みんなで声を掛け合っていたところがいいね」とよいところを見つ

けていた。そして、「アンダーハンドパスばかりだったからオーバーハンドパスも入れたほうがいいよ」「次の人がとりやすいように高く大きな山になるようにあげるといいよ」とアドバイスする姿も見られた。そのことを自分たちのチームにも活かしてパスを回そうとしていた。

〈第3次〉

ソフトテニスバレーボールのルールを教師から提示した。

- コートに入るのは4人。もう一人は相手コートから後方（コートを前方，後方半分にする）に投げ入れる。
- ワンバウンドしてもよい。一人何回さわってもよい。
- 何回さわっても相手コートに返したら2点。5回のうち何回返すことができるか。
- 相手コートの後方に返すと4点。

ペアのチームで協力し、ゲームをするチームと、得点・審判をするチームに分かれた。

最初は、相手コートに返すことに一生懸命であった。しかし、後方に投げ入れられたボールを返すことがむずかしく感じたり、高得点をねらおうと考えたりする子どもがでてきた。そこで、どうしたら高得点ゾーンに返すことができるか考えていった。すると後方の人が前の人にパスをして前の人がボールを返せば高得点がねらいやすいことに気づき、パスの必要性を感じることができた。そして、実際にゲームをしてみると高得点を取るチームが増えた。その中には作戦だけではなく、それを活かすために、第2次で見つけた「よい動き」についてお互いアドバイスし合うことができていたからでもあった。また、ワンプレーごとに選手が入れ替わるため、だれにパスをしたらよいのか、だれが返したほうが高得点につながるのか作戦を確認しながらゲームを楽しむことができていた。

(5) 結果と考察

- パスの必要性を感じ、運動を楽しむことができたか。

①授業での子どもたちの実態・変化から

第3次で、高得点をねらうために前の人にパスを回さないといけないことに気づき、その後のチーム練習の時間はチーム内でパスを回す練習を繰り返すようになっていた。このことから、パスの必要性を感じ、その技能を高めゲームの中で進んでパスを使おうとしていたことが分かる。

②振り返りから

「最初はどんどんアタック（スパイク）をしたいと

思っていたけど、そのためにはアンダーハンドパスやオーバーハンドパスがしっかりできないといけなかった。」という振り返りが多かった。

これらのことから、相手のコートの思ったところに返すために、自分たちでパスをつなぐことの大切さに気づくことができた。さらに、このことはこれからのソフトバレーボールやバレーボールでの3段攻撃などの考え方に生きてくると考える。

- 作戦のよさや有効性を感じることができたか。

①アンケートから

「作戦は必要であるか」については事後もほとんどの子どもたちが必要であると答えている。「なぜ必要かについては」については「作戦があるとどのように動けばいいか（どうすればいいか）分かるから」「高得点をとるために」という答えが多かった。さらに、「作戦を考えていると友だちの考えを聞くことができたり、自分の考えていることを言ったりすることができるのでよかった（必要）と思う。」という意見もあった。

②ふりかえりから

第3次で、「友だちと入れ替わる時に、ほくのところにパスしてよとか、できるだけ高くパスしてよとか1回1回声を掛け合うことができたのでよかった。」「作戦タイムのあとに練習する時間があつたので、ゲームではうまくいかなかったこともあつたけど少し、自信をもってできた。」と子どもたちは授業を振り返っていた。

これらのことから、子どもたちは作戦のよさや有効性を感じてゲームをすることができていたことがわかる。また、考えた作戦を定期的に確認できるようにすることで、安心してゲームに参加し達成感や充実感を味わわせることができた。さらに、「高得点をとるために」というように学習課題に沿って作戦を考えていたことから、教師は子どもたちの実態に応じた課題やねらいを設定することの大切さも改めて感じた。

- 友だちと協力して作戦を考えたり、友だちのよいところや、がんばったらよいところをアドバイスしたりして運動することができたか。

①アンケートから

「自分の考えを言ったり、友だちの考えを聞いたりしてチームで作戦を考えることができたか。」については、ほとんどの子どもができたと答えていた。また、「友だちのよいところや、がんばったらよいところをアドバイスして運動することができたか」については、「よいところ」は全ての子どもができていた。「がんばったらよいところ」についても半分以上の子どもたちができたと答えていた。これはアドバイスする相手を

1対1で決めていたり、アドバイスする内容を「よい動き」としていつも確認できるように掲示したりしていたこともそのような結果になった要因であると考えられる。

②授業での子どもたちの実態・変化から

授業の度によいところをほめるばかりではなく、「もう少しひじを伸ばしたらいい」「もっと早くボールの下にいった」など改善点をアドバイスする声が少しずつ多くなっていった。これは、2人組みでアドバイスし合うことを続けることで信頼関係ができ、安心してアドバイスできるようになったと考えられる。さらに、チーム同士で見合うことによって、集中して観察でき、よい動きの視点で正確にアドバイスできるようになったため、アドバイスを受ける子どもの方もアドバイスを受け入れやすくなったと考えられる。ゲームでは、ワンゲームごとにその作戦がうまくいったのかということも確認できたためお互いを評価し合い、さらに作戦を変えていこうとするチームも出てきた。このことはコミュニケーション力を高めるうえでも有効であった。

これらのことから、子どもたちは、友だちと協力して作戦を考えたり、お互いにアドバイスし合ったりすることができたということができた。そのためには、アドバイスする相手や内容をはっきりとさせ、その内容を伝え合う場を大切にすることが大事である。

(6) 成果と課題

成果としては、次の3点が考えられる。1点目は、今回の「ソフトテニスバレーボール」は、チーム内でパスをつないで攻撃に移すというバレーボール特有の楽しさを感じ取るきっかけになったとともに、パスの必要性を感じとり、練習やゲームで活かそうとすることができた。2点目は、ワンゲームごとに選手を入れ替えるため、自分たちでつくった作戦を確認でき、安心してゲームを楽しむことができた。3点目は、その作戦がうまくいったのかということも確認できたためお互いのよいところや改善点もアドバイスすることができ、コミュニケーション力を高めることができた。これはその時間をゲームの中で確保できたことが大きいと考えられる。

課題は次の2つが考えられる。1つ目はゲームを想定した動きの取り入れ方である。ゲームでは後ろ向きにボールをはじいて相手コートに返す動きは必要であったが、その動きを事前に練習することができなかった。また、ゲームの中でその課題を共有し、練習していくことも必要であった。2つ目は、作戦を考えるとこで主体的に話し合いに参加できていない児童のための支援がたりなかったということである。課題に対

して自分の考えを持って話し合いに参加のできるように、ワークシートなどの活用が必要であった。

実践②

単元	バレーボール
学年	中学校第8学年(42名)
実践月	平成19年11月/12月

(1) 単元について

①題材について

バレーボールは、ネットをはさんで2つのチームが、空中にあるボールをつないで攻撃や防御をして得点を競い合う運動である。相手プレーヤーとの身体接触の場面がなく、自分たちのチームの働きを直接阻害されることなくプレイできるという特性を持っている。

個人的技能の要素としてはボールに瞬間的にタイミングを合わせることに困難を伴う。また、ボール操作技能とともに、ボールに触れないときの位置取りの仕方が重要なポイントになってくる。さらに、特性として次のこともいえる。安全性が高い。全身的运动である。集団としてのプレーが中心になり、集団と個人との相互依存関係を深めることができる。学習者の能力に応じて学習活動を与えることができる。パズゲームからの発展段階がわかりやすい。学校を離れても生涯にわたって行うことができるなどである。

②生徒の実態

本学級の生徒は昨年度の生徒と同様に、これまで学習した内容の中で「球技が好きだ」とほぼ全員の生徒が答えており、小学校においてもソフトバレーボールに、多くの生徒が意欲的に取り組む姿勢が見られた。また、バレーボールに対してどんな印象を持っているかアンケート調査を行ったところ、「アタックを打って決まったときはうれしい」「レシーブしてつながった時うれしい」「みんなで協力してできたときは楽しい」など集団として、仲間と活動し、取り組むことに喜び、楽しさを感じるプラス面の印象が多い反面、「パスが続かないから面白くない」「早いボールが来たら怖いし、当たったら痛い」「同じ人ばかりやって面白くない」などというマイナスの印象も多かった。

③指導にあたって

バレーボールの楽しさは、ゲームの中でラリーを続けられることである。しかし、バレーボールでは高度なボール操作技能を必要とし、ラリーの楽しさを味わえないまま授業を終えることが多かった。そこで、ラリーを続けるためのボール操作技能を高めるための活動を多く取り入れた授業を展開し、ラリーの楽しさを体験させ、ラリーの中で攻撃を意識させたゲームへとつなげていきたい。また、バレーボールが集団で行う

球技であるので、役割分担や作戦などのチームワークが欠かせないこと、個々のプレイヤーがチームを支えるので、個人技能の向上がチームにとっても欠かせないこと、さらに、それらを高めていくためにゲーム性のある活動（練習）の中で個人の技能を向上させていくことを学習させていった。また、それらを通じてバレーボールの楽しさであるラリーの楽しさを味わわせ、今後も機会があれば進んでバレーボールをしたいと思うよう指導していく。

(2) 単元目標

- 個人に応じためあてを設定し、チームの課題解決に向けた攻防の仕方を工夫できる。(思考・判断)
- チームにおける自己の役割・責任をふまえ、楽しみながら取り組むことができる。(関心・意欲・態度)
- 自己の能力やチームも課題解決に必要な基礎的技能を身につけることができる。(技能)
- ゲームの運営に必要な基礎的な知識を学び、理解できる。(知識・理解)

(3) 計画(全10時間)

- 第1次 オリエンテーション……………1時間
(学習のねらい、進め方、ルール、チームや自分の目標を決定する)
- 第2次 基本技能を身に付けながら、ゲームを楽しむ……………4時間
- 第3次 技能の向上に応じた練習を行い、作戦を立てゲームを楽しむ……………4時間
- 第4次 学習してきたことを評価し、まとめをする1時間

(4) 授業の実際

<第1次>

オリエンテーション

オリエンテーションにより、今回のバレーボールの授業の流れについて説明を行った。昨年と同様に、今回のバレーボールでやってみたいこととして、やはり「ゲームがしたい」「スパイクを打ちたい」など攻撃に関わった技能などに非常に強い興味、関心を示した生徒が多くいた。しかし、そんな中でも、「セッターをやってみたい」「いろいろな攻撃をしてみたい」など昨年にはなかった意見も聞くことができた。その後、チーム分け、今回の授業の進め方について説明し、オーバーハンドパスとアンダーハンドパス、スパイクの練習に入った。

まず、直上パスの練習においてペア（このペアは2対2におけるチームとなる）での活動により、お互い

がフォームチェックをしながら習得をはかっていった。直上パスは毎時間の授業で回数を記録していき、その練習のなかでペアでフォームを確認し、チェックカードに記入し技能の向上を図った。昨年度から公式球を使っているが、重さ、柔らかさにとまどうことなく、生徒たちは逆に公式球の重さ、感触を確かめながら意欲的に取り組んでいた。

次に、スパイク、サービスの基本となる腕の動き・助走からのスパイクを練習させたところ、これまで味わったことのない感触を楽しみながら取り組んでいた。スパイクにおいても、ペアによる活動をいかし、クイックスパイク、高いトスからのスパイクなどを通して、技能習得とともにゲームに繋がるコンビネーションを常に意識しながらの活動を仕組んでいった。

ペアの組み合わせとしては、男女別で身長が同じくらいの生徒とのペアリングとした。その理由として、男女の体力差とスパイク、パスなどの練習へ取り組む上で、ネットの高さ、技術練習などを考慮したためである。

今後の授業について、ゲーム（作戦学習）を中心に進めていくことと主要なルールを伝え、個人の目標（パス、スパイク、サービスなどの個人技能とチーム内での役割による）、チームの目標（ゲームにおける）を考えさせて授業を終えた。

<ゲームにおける主要なルール>

1. ボール…公式球(240g)
 2. 人数…1対1～4対4（作戦学習により4対4まで増やしていく）
 3. コート…3m×3m～4m×4m（人数により大きさを変えていく）
 4. ネットの高さ…185～200cm
 5. 基本的なルール
- サービスは相手コートから、後衛の人に下から投げ入れる。ネットに触れた場合はやり直しとする。
 - 3回以内で相手コートにボールを返す。
 - ローテーションを行う。
 - 得点はラリーポイント制とする。
 - 3段攻撃で決まった場合とブロックによる得点の場合は3点、その他は1点とする。
 - セッターとしてオーバーハンドパスでトスを上げる場合は、ボールを保持しても良い。
 - 1セット10点先取、または時間制で得点の多いチームを勝ちとする。
 - 審判・記録・計時は試合のないチームが交代で行う。
- ※細かいルールについては、毎回のゲームにおける振り返りから変更していくこととする。

〈第2次〉

基本技能を身に付けながら、ゲームを楽しむ

前時での個人の目標を確認させ、ペアでの活動へと入っていった。授業の流れとしては、まず始めに、ペアによる直上パスの練習を行った。次に、ネットを挟んで対面パスを行っていった。①オーバーハンドパスのみ、②アンダーハンドパスのみ、③オーバーハンドパス、アンダーハンドパスを組み合わせてなど、生徒たちがお互いで約束(ルール)を決め、確認しながら練習に取り組んだ。また、三段攻撃の意識づくりとして、一人での三段攻撃、アンダーハンドパス(レシーブ)→オーバーハンドパス(トス)→スパイク(フェイント)の練習を行わせた。常にゲーム性を持たせ練習を行った。また、2対2により三段攻撃を意識させたゲームを行い、セッターの役割とコンビネーションを理解していった。スパイクに関して、高いトスだけでなく速攻(Aクイック、Bクイック、Cクイック)なども積極的に使っていくチームも見られた。その後、3対3へと人数を増やすことにより、攻撃のバリエーション(作戦)を考え、作戦カードにそれぞれの動き、役割を記入していった。ボールに3人全員がかかわることを全体の課題、目標として行った。それぞれの役割がはっきりとしていることで、生徒たちが積極的にゲームに取り組む姿が見られた。

〈第3次〉

技能の向上に応じた練習を行いゲームを楽しむ

前時までの授業を振り返りながら、チームで考えた攻撃パターンを確認していった。コートの中からボールをセッターに投げ入れ、トスを上げそれにあわせて走り込みスパイクを打つ。セッターの選択によっていくつかの攻撃パターンができていった。バレーボールに知識がずば抜けた生徒はいないが、先にも述べたようにテレビ中継のいい影響で時間差攻撃や、バックアタックなど本格的な作戦もあった。さまざまなアイデアを出し合い、チームで取り組んでいった。

その中で、生徒たちは攻撃を成功させるポイントとして、「スパイクを打つときのタイミングが合わなかった」「トスを高くすればいい、トスを上げる位置を考える」といったタイミングや予測をした動き、パス



の質に関わる記述が、学習カードに見られるようになった。スパイクは、セッターとスパイクのコンビネーションが一

8学年バレーボール 学習カード

8年 9 期 11月14日(水)

8学年バレーボール 学習カード

8年 10 期 11月19日(月)

課題：自分たちのチームでオリジナルな攻撃を考え、ゲームの中で成功させよう！

○ 前回の授業で行った攻撃パターンを参考に、自分たちのチームのオリジナルな攻撃を考えよう

前回の授業で行った攻撃パターンを参考に、自分たちのチームのオリジナルな攻撃を考えよう

選手動きを矢印で書こう

オリジナルの攻撃

チームでオリジナルな攻撃に挑戦してみよう！

速攻が絡んだ攻撃の例

○ 今日の自分たちのプレー(攻撃)を振り返って(自分たちの攻撃が成功したチームは、何が良かったか?攻撃がうまく機能しなかったチームは、何が課題なのか?書きましょう!)
今日は速攻が絡んだ攻撃に挑戦して、セッターがトスを上げた。タイミングが合っていたのが良かったと思う。作戦をうまく使ったので、試合も楽しめた。

○ 次のゲームに(上の課題解決に向け)自分はどうに取り組みたいか?
チームでしっかりと話し合おう。作戦を練ろう。一人ひとりの役割を確認しよう。3段攻撃を基本に、攻撃は速攻と組み合わせよう。プロダクが強いので、プロダクもしっかりと練習したい。その後は、速攻と組み合わせよう。このまま練習したい。

図1 学習(作戦)カード1

課題：ゲームの中でチームで考えた攻撃を成功させよう! part2

○ 前回の授業で行った攻撃パターンを参考に、自分たちのチームのオリジナルな攻撃を考えよう

前回の授業で行った攻撃パターンを参考に、自分たちのチームのオリジナルな攻撃を考えよう

選手動きを矢印で書こう

オリジナルの攻撃

チームでオリジナルな攻撃に挑戦してみよう!

速攻が絡んだ攻撃の例

○ 今日の自分たちのプレー(作戦)を振り返って(自分たちの作戦が成功したチームは、何が良かったか?作戦がうまく機能しなかったチームは、何が課題なのか?書きましょう!前回と比較しながら)練習の時には、次の成長に合わせて、上手く攻めることができたが、いざ実戦となると、その練習のことは忘れて、作戦を実行することができなかったのが残念だった。でも、次回は練習で練習したことを思い出して自信を持ってプレーしたい。

○ 次の練習やゲームに(上の課題解決に向け)自分はどうに取り組みたいか?
いざ作戦を実行するとなると、もっと話し合おうとしたい。思い出して自信を持ってプレーしたい。

図2 学習(作戦)カード2

致しないと成立しないことに気付いていった。また、ゲームでの三段攻撃を、スムーズに行っていくには、正確なパス（一本目のパス（レシーブ）、2本目のパス（トス））が必要であるとの感想が多く出るようになった。そのためペアでのパスゲームを授業の始めに練習として再度取り入れていった。その後、4対4のリーグ戦を行いチームの作戦、課題についての確認をしていった。リーグ戦のゲームではプレイすることだけでなく、審判、ラインズマンなどについても学習を進めていった。

〈第4次〉

学習してきたことを評価し、まとめをする

授業のはじめから続けてきたパス（オーバーハンドパス、アンダーハンドパス）の記録及びペアによるフォームチェック表をもとに自己評価を行うとともに、スキルテストを実施した。また、ゲーム記録により、チームにおける課題について各チームごとに評価していった。あわせて、本年度も「バレーボールの学習を振り返って」のカードを使い、バレーボールという運動の楽しさについて、仲間とともに互いに助け合い高め合う学習を進める喜びについて、自ら計画・目標を立てて自発的・自主的な学習を展開することについて、バレーボールの運動技能の高まりについて、次年度への運動の期待について自己評価し授業を終了した。

4対4の作戦を考えよう！

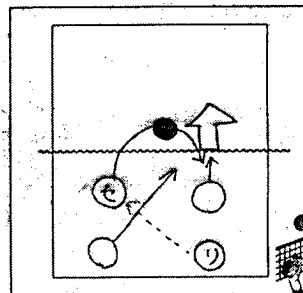
12月7日(金)

8年2組

★今日のチームの目標

相手からのアタックをレシーブでなるべくとろう！

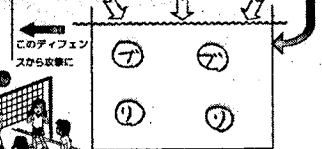
★ゲームの作戦図(攻撃)



★ディフェンスの作戦(ポイント)

ブロックは、体をネットにつけて、徹底的に返すようにする

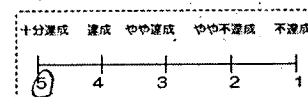
★相手の攻撃に対するポジション



★ゲーム対戦結果とゲーム分析

対戦相手	試合結果(勝○負×)	対戦相手	試合結果(勝○負×)
(4)班	(10)対(8)(勝)	(7)班	(20)対(9)(勝)
勝因(なぜ勝ったのだろうか?)		敗因(なぜ負けたのだろうか?)	
オフェンスのやり方を複雑に考え、初めて試合の中でそれをやることかできた。いつもは負けばかりだったが、作戦を上手く実行することで、勝つことができた		相手のブロックがしつこくしてきていたので、すぐに返されてしまった。スパイク打ったら安心して気を抜いてしまい、負けてしまう。最後まで気を引き締めていきたい。	

★今日の目標の達成度は



いつも負けていたが、今日は2勝(敵)と、今まで一番の好成績で、良かったです

図4 ゲーム記録・作戦カード

バレーボールの基本技能

年組番氏名

最も大切なことは?

体を入れず、リラックスした状態で両足は多少前後し、肩幅よりやや広く足を開く。また、胸より下に来たボールはアンダーハンドパスを、胸より上に来たボールはオーバーハンドパスを活用することです。

達成度は、とてもうまくできた「4」うまくだきた「3」なんとできた「2」もう少しがんばるぞ「1」で評価しよう。

(アンダーハンドパスの学習)		(オーバーハンドパスの学習)	
月日	達成度	月日	達成度
4/3	2/1	4/3	2/1
4/3	2/1	4/3	2/1
4/3	2/1	4/3	2/1
4/3	2/1	4/3	2/1

○手のひら同士を合わせ、2本の親指をきちんとそろえる。

○親指と人差し指で顔の前に三角形をつくり、両脇を第2関節まで使う。

○両ひざを軽く曲げ、ひざを十分に伸ばし、腕と体の角度をほぼ90度にする。

○ボールは正面から、両手で同時に手首に近い場所で、ヒットできるようにする。

○落下地点を読み、手の位置を固定したままボールを正面でとらえる。

○体壁を前に移動させる感じで、ひざを軽く伸ばしてボールを飛ばす。

○背筋を伸ばしてひざを曲げ、ひざを伸ばす力を使ってボールをはじき飛ばす。

○おごをひき、上目遣いでボールを見る。

図3 学習(パス技能)カード

バレーボールの学習を振り返って

12月19日(水)

8年2組

1	バレーボールは楽しかったですか。	◎
2	バレーボールの学習の進め方がわかりましたか。	◎
3	自分にあった課題の持ち方ができましたか。	◎
4	自分で作った計画に沿い、工夫して練習ができましたか。	◎
5	チームで作戦が立てられるようになりましたか。	◎
6	仲間と互いに助け合ったり励まし合ったりできましたか。	◎
7	技能を高めたり、知識を深めることができましたか。	◎
8	ルールやマナーを守ってゲームや練習ができましたか。	◎
9	チーム内の係などの役割を果たすことができましたか。	◎
10	バレーボールをもっとやりたいと思いますか。	◎

◎よい、○まあよい、△もう一息で記入

できるようになったこと(技能面)	学習を通してわかったこと(知識面)
バレーの基本のレシーブ、トス、スパイクの3つができるようになりました。	バレーは人数が多くなるほど作戦やが増えるが、逆に息を合わせるのが難しくなることを学んだ。
【学習全体の感想】 初めは、パス練習からのスタートであまりおもしろくはなかったけど、試合をしてみると、いつのまにかパスが上手になっている自分に気が付き試合もとても楽しく感じられていました。 やはり基礎練習も大切だと改めて実感しました。 またバレーの授業をしたいです。	

図5 バレーボールの授業の振り返り

(5) 結果と考察

生徒に事後のアンケート（バレーボールの授業を振り返って）を行った。その中からいくつかの項目について考察していく。

まず質問①の「バレーボールは楽しかったですか」については、多くの生徒が楽しく活動することができた結果となった。昨年から公式球を使用して取り組んだが、生徒たちはボールが手、腕に当たることをいやがらず、スパイクやサービスなど、ソフトバレーボールでは味わったことのない感触に喜びを感じていた。また、自分たちが考えた作戦が成功したこと、チームの仲間とのつながりを喜び・楽しかった理由を自らの言葉で述べている生徒も多いた。

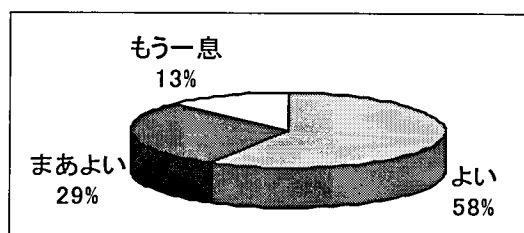


図6 バレーボールの楽しさ

質問⑥「仲間と互いに助言しあったり、励まし合ったりできましたか」についても、ほぼ全員ができたと答えている。ゲーム中の声かけ、練習中でのアドバイスなど学習カードの振り返りにも「何回も失敗したけど、みんな特に怒ったりとかせず『ドンマイ』とか言ってくれたので良かった。」など書かれてあったが、生徒たちがコミュニケーションの大切さを感じてきたように考える。「もう一息」と答えた生徒は、仲間からの励ましには感謝しつつ、自分からこえかけができなかったと感想を述べていたが、自分に対して厳しい評価をしたと考える。

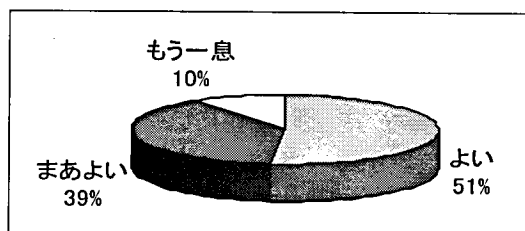


図7 仲間と互いに助言しあったり、励まし合ったりできましたか

質問⑦「個人技能を高めたり、知識を深めることができましたか」については、多くの生徒がスパイク、ブロック、サービス、パスなどの技能の高まりを感じていた。今回、個人技能習得を大きな課題として、ゲームを取り入れた内容を進めていく上で、試合のルールとして、コート大きさ(3m×3m・4m×4m)、

ネットの高さ(1m85cm～中学校女子～)、人数(2人～4人)を変えてゲームを行ってきた。そのことが、スパイク、ブロック、パスなどの技能を容易にさせたと考える。また、チームで三段攻撃からの攻撃パターン、フォーメーションを考えさせていったことが、積極的に三段攻撃をゲーム中に使っていこうという気持ちにさせた。三段攻撃を成立させるためには、正確なパス(セッターに正確に返すレシーブ、セッターからスパイカーへのトス～生徒の振り返りから～)が必要不可欠であることなどの知識理解につながったと考える。

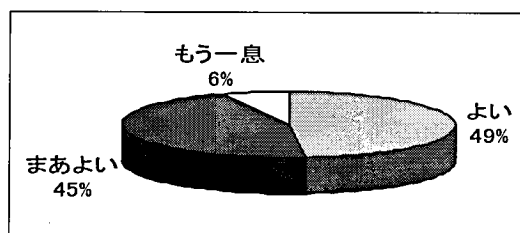


図8 技能を高めたり、知識を深めることができましたか。

質問⑩「バレーボールをもっとやりたいと思いますか」については、8割の生徒がもっとやりたいと答えている。これは次年度へ向けてのレベルアップにつながるかと考える。しかし、その逆に、バレーボールに関して苦手意識を持っている生徒がいることも事実である。来年度の課題として仲間とのつながり、コミュニケーションを大切にしたい授業を続けていきたい。

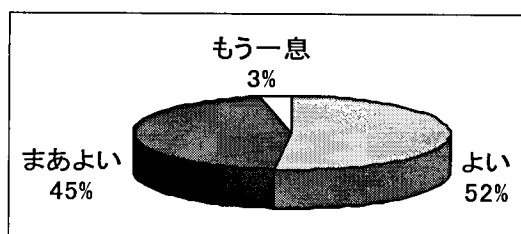


図9 チームで作戦を立てられるようになりましたか。

4. おわりに

小中一貫でバレーボールの系統性を考え、すべての学年の授業実践を通じて、9年間を見通したカリキュラムづくりをおこなってきた。これらの実践を通して、コミュニケーションスキルが大切であることに気づくことができた。その中でも生徒同士の「声かけ」、教師から生徒への「声かけ」(アドバイス)が重要であると再認識した。そして、この学習で培われたコミュニケーションスキルを、今後あらゆる運動の場面で生かしていけるようにしていくことが大切であると感じた。また、バレーボールの授業で大切なのは、バレー

ボールの楽しさが、どのような攻防の過程から生まれてくるのかを、攻撃と守備を組み立てる作戦作りを仲間との話し合わせる学習を通じて理解させていくことであると感じた。現中学8年生は、本研究をスタートさせた小学5年生時より継続して、バレーボールの授業を学習してきた学年である。今回の授業実践の中で「連携プレー」や、「声かけ」等のゲームや練習に積極的に取り組む子供たちの姿から生徒の個人技能も徐々にではあるが向上しているように感じた。今後もさらに小中の教員が連携をはかり、学年に応じた学習内容を吟味・工夫した授業づくりを心がけていきたい。

【参考・引用文献】

- 小中一貫における攻守混合型ボール運動のカリキュラム開発（1）広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要 第32号 2004. 3 別冊
- 小中一貫におけるネット型ボール運動の指導カリキュラム開発～ソフトバレーボールの発達段階における指導方法Ⅰ～広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要 第34号 2005. 3
- 小中一貫におけるネット型ボール運動の指導カリキュラム開発～ソフトバレーボールの発達段階における指導方法Ⅱ～広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要 第35号 2006. 3